

第18回 教行信証に学ぶ会 講師:延塚知道先生

2022(令和4)年10月6日 会場 円徳寺

講題 : 「行巻」七祖の結釈・行の一念釈

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

どうもこんにちは。少し涼しくなりましたが、これから、また報恩講の季節がはじまりますので、また忙しくなります。明日、あさってから北海道で十日ほどお話をし、帰って来て2～3日してから、またすぐもう一回北海道に行きます。今年は、ご本山の報恩講、11月28日のご満座の日に「祖徳讃嘆」を、宗祖のどう言ったらいいでしょうか、宗祖独特のお仕事に対する讃嘆をお話をしなくてはならないことになっていますので、ちょっと頑張らなければならないと思っています。

昨日、おととい、今度ご本山が出してくださる三部経の本、皆さん『『教行信証』の世界』をお読みくださっていますが、今度は『『大無量寿経』の仏者 親鸞』、サブタイトルが「一宗祖の三部経観一」という本を書きました。『『教行信証』の世界』(東本願寺出版)よりもちょっと厚くなります。三部経と『教行信証』、それから七祖ですね、七祖は方丈堂出版から『高僧和讃講義(1)～(4)』と言う本を出しておりますので、それを読んでいただければわかりますが、それだけあれば宗祖のお仕事がよくわかると思います。出来上がりでしたら、またお読みくださったら大変ありがたいというふうに思います。僕もご本山からそれだけ出してもらったら、もう死んでもいいかなと思ってはいるのですが、どうもしぶとそうですので、もう少しここで『教行信証』をお話し出来たら大変ありがたいと思います。

しかし、もう3年経ったということで、しばらくみなさんよく付き合ってくださいました。特に教の巻、それから、七祖、ここはかなり丁寧にこれまで読んでまいりました。大切だと思うか

ら読んでまいりましたが、今日とこの次くらいで行の巻は終わると思います。よく付き合っ下さったなあと思います。難しかったですか……、そういつて下さると大変ありがたいのですが。

龍樹菩薩は、簡単に申し上げますが、龍樹菩薩は大乗仏教の菩薩道しかなかった、そういう世で菩薩道の行ではなくて、本願の信心によって空の覚りを得る道があると、これを明らかにしたのが龍樹でした。浄土教は浄土往生と言うふうに『観経』で申しますから、この「覚り」と言うことはあまり言わない。けども親鸞聖人の『教行信証』、『大経』による親鸞聖人の『教行信証』、それから「正信偈」、これも『大経』の讃歌ですから、そこになると従来から伝統されてきた「往生浄土」と言うことをあまり宗祖は言われぬ。覚りの方に重心がある。だから龍樹は一番最初に「信心によって空の覚りを獲る道がある」と言われた。これが出発点です。とても大事です。

ところが空の覚りと言つても、これは他力によっていただく覚りだから、世親菩薩になると「能令速満足 功德大宝海」、こう言つて、如来の方が能くせしむ、能く如来の方から私たち衆生の根本志願を満足せしめてくださる。そういう形で功德の大宝海。仏様の功德が詰まった大きな海のような世界を私たちに開いてくださった。龍樹菩薩が「空」と言つて下さったところを世親菩薩は浄土教の「浄土」として表してくださった。そしてその浄土は、能く如来の方から、満足せしめさせて下さる大きな海のような世界に目を開くのだと、こうおっしゃってくださった。

曇鸞はインドの菩薩道を凡夫の仏道に転換して、この辺から、曇鸞のところからだんだん浄土教になっていきます。凡夫の仏道に転換して、凡夫が浄土に生まれていつて「正定聚」に住する。そういう仏教を世親が明らかにしてくださった。菩薩道から凡夫道に転換してくださったのが曇鸞です。それを受けて道綽が、信心を曇鸞が三不信といったものを三不三信として明らかにしてくださった。そして末法になって、私たちに開かれる仏教は聖道門のように修行によって頑張つて覚りを獲るといふ道はもう無理だと、如来の方から開かれてくる浄土の教えしか一切衆生が立つ道はないと言つて、道綽が聖道、浄土を建てて、浄土の一門を建ててくださった。

その道綽の信心の三不三信の三信の方、自力が混ざらない純粹な信心の方を善導大師は専修念仏として引き受けられた。自力が混じった雑修の方は雑行として引き受けられた。そんなふうにして道綽と善導の師資相承を通して善導大師は念仏一つでいいといふ道を明らかにしてくださった。六字釈、これを皆さんと勉強しましたね。

そしてそれを受けて日本の源信になると、これまで浄土教の行、つまり雑行か専修かといふ行の規定、中国までは行の規定が基本的な浄土教の受け止め方ですが、日本の源信になると念仏を称えているこの私がどうかといふ、念仏を称えている主体の方に目を移して、そして、念仏が正行で、正しい専修念仏であったとしても、わたしのような死ぬまで煩惱の消えないものはどうしたらいいのかと言つて。皆さんよくご存知の「煩惱にまなこさえてみたてまつらんといへども、大悲ものうきことなくして、常にわが身を照らしたもう」（「正信偈」）、煩惱のまま第十八願の世界にあるのだと、こういう道を明らかにしてくださった。

法然は、もちろんそれを受けて明らかにして下さいますが、法然の教学は、道綽・善導を受けていますから『観経』の教学です。『観経』は本願が説かれていないために、本願力回向といふことが言えない。だから、親鸞聖人は法然上人の行を「不回向の行」としていただいて、不回向の行といふのは人間が努力しないといふ意味です。ところがそれだけでは、人間が努力しないだけでは何のことかわからないから、今度は、はっきりと「本願力回向」によるのだといふふうに『大経』によって本願力回向といふことを公にしていくのが親鸞聖人の『教行信証』の仕事にな

ります。この辺まで、3年かかって勉強してきました。もう多分皆さんはお忘れでしょうね。

けども七祖はそれぞれ時代と国と全部状況が違います。インドの天親・曇鸞になると菩薩道しかなかった。そういう制約の中で、その菩薩道を超えた仏教があるのだということを明らかにしてくださった龍樹・天親、さらに中国の曇鸞・道綽・善導大師、ここにくると、仏道がいかに聖道門のように伝わってきているけれども、「浄土の仏教」しか一切衆生が立つ（救われる）仏教はないのだ。それは仏様の方から開かれた仏教だからだ。これを明らかにして下さった。法然上人は善導を受けて「念仏一つでいい」と言うことを教えてくださった。

それで今日は七祖の結帙のところ、一番大事な結びのところを皆さんと一緒に拝読していくこととなります。大変難しい『教行信証』によくついてきてくださったと、そういうふうに思います。東聖典189ページ（西186、島12-37）のところはこの間みなさんと明らかにしました法然の『選択集』を受けて親鸞が、

「明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行にあらず。かるがゆえに不回向の行と名づくるなり。大小の聖人・重軽の悪人、みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし」

これ親鸞聖人が法然上人、七祖を受けた最終的な結論です。そしてこれを受けて、東聖典190ページ、ここになりますが、ここに一つだけ引文がでます。これは重要な引文ですから、皆さん頭の中にあると思いますが、

「ここをもって『論註』に曰わく、「かの安楽国土は、阿弥陀如来の正覚浄華の化生するところにあらざることなし。同一に念仏して別の道なきがゆえに」とのたまえり」

この文章が一つ引文されます。これは七祖の誰一人をとってもこの文章に収まると言うわけです。龍樹であろうと、「阿弥陀如来の正覚浄華の化生」と言うところ、ここが大事、阿弥陀如来の正覚浄華と言うと蓮華の華ですけれども、これは涅槃の覚りです。大涅槃の覚り、念仏は大涅槃の覚りを開いて、だれも、一切衆生を蓮華化生・浄土に生まれさせる。こういうはたらきがある。だから念仏は同一に念仏して、念仏だけは一切衆生を平等に別の道はない。往生と言う道に立たせるのだ。こういう意味でここに眷属功德の文章が引用されます。

特にここで大切なのは、「阿弥陀如来の正覚浄華の化生」というところ、そして「念仏して別の道なし」これが大事、わかりますね、これまで七祖は今申し上げましたように、龍樹は信心によって空を開くのだと、ところが空は、これは空と言ってもわからないから、世親になると「浄土」のことだというふうに言って、念仏して、私たちは浄土が開かれるのです。こういうのが真宗の一番大事な覚りの形態です。そこからすると、それをよく表す阿弥陀如来の安楽国・浄土は阿弥陀如来の大涅槃の蓮華の覚り、それからみんな生まれてくるから、どんな人にも念仏の道以外にあるはずがないと、こういう意味の文章になります。実はこの文章は、この行の巻と、それから証の巻、せっかくですから申し上げますが、東聖典282ページ（西310、島12-120）、皆さんすぐ忘れるから、これ証の巻になると必ず大切だから、みんなで読むから。その時にまた言いますが、282ページの真ん中辺にあるでしょう。12というところに

「莊嚴眷属功德成就」は、「偈」に「如来浄華衆 正覚華化生」のゆえにと言（のたま）えり。これいかに不思議なるや。おおよそこの雑生の世界には、もしは胎、もしは卵、もしは湿、もしは化、眷属若干（そこばく）なり、苦楽万品なり、雑業をもつてのゆえに。」

わかりますね。この私たちの世界は腹から生まれるもの、卵から生まれるもの、ぼうふらのように水から生まれてくるもの、あるいはコロナのウイルスのようによくわからないところからぼ

かんと生まれてくるものがある。生き物は眷属若干（けんぞくそこばく）なり、みんなそれぞれ別々の形をとってこの世に生きていく、だから苦楽万品なり、苦もみなそれぞれ違う、業が違うからだ。

ところがかの安楽国に生まれたものは、先ほど申しましたように、阿弥陀如来の正覚の華から生まれてくるから、だから浄土に生まれ、この世の業が清まって念仏一つに生きるものになっていく、

「同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷属無量なり。いづくんぞ思議すべきや。」

これが行信の証としていただける。わかりますね、行信。南無阿弥陀仏と頭を下げた人の身に感動としていただける覚りがこういう意味を持つのだと、莊嚴眷属だから念仏のところにもこの文章があり、証のところにもこの文章がある。もう一つある。もう一つは東聖典323ページの一番最後です（西372、島12-158）。ここは真仏土の巻です。真仏土の巻に

『論』には「如来浄華衆正覚華化生」と曰えり。または「同一念仏して無別の道故」（論註）と云えり。」

と出ています。こんなふうに行の巻と証の巻と真仏土の巻、行の巻と言うのは念仏すれば必ず開かれる。だからそれは証の巻にも説かれる。そして、それは実は仏様の覚りそのものだからだ。大涅槃の華化生、涅槃の覚りから生まれるから、仏様の覚りそのものだからという意味で真仏土の巻でも引かれる。そんなふうにか所々に引かれている重要な文書だということを知っておいてください。いいですか、今申し上げたことわかりますか、一つは念仏によって開かれる覚り、だから証の巻にもある。そして、それは仏様の涅槃の覚りそのものから生まれてくるのだから真仏土の巻にもある。そんなふうにかこの文章は大変重要な文章ですから覚えてください。「同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。」いい言葉でしょう。そんなふうにかこの言葉は実に大切な言葉なのです。

そしてここに置かれているのは、七祖のどれをとってもみんな大涅槃の覚りから生まれてくるのです。これを七祖の人たちはみんな、それぞれの立場で明らかにしてくださった。そうですね、先ほど申し上げました。大涅槃の覚りを私たちは戴くのだと。これが『大経』の仏教の一番大切なところだから、この文章一つをここにばかっと引用した。大切ですね。そしてそれを受けて親鸞のまとめの結釈が書かれます。これは皆さんと一緒に最後までゆっくり読んでみましょうか。いいですか、東聖典190ページ（西186、島12-37）、

「しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆえに、これを「歓喜地」と名づく。これを初果に喩（たと）うることは、初果の聖者、なお睡眠し懶墮（らだ）なれども、二十九有（註1.）に至らず。いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う。」

註1:二十九回目の生。初果の聖者(しょうじゃ、須陀洹(しゅだおん)果(註2.)を得たもの)は、人間界に七生、天上界に七生、またそれぞれ生の終りから次の生を得るまでの中有(ちゅうう)の状態(死と生の間の中間的存在)の十四生、合せて二十八生を経れば、さらに二十九回目の生をうけず、完全な涅槃に入ることができるとされる。

註2:須陀洹:梵語スロータ・アーパンナ(srota-āpanna)の音写。預流(よる)と漢訳する。はじめて法の流れに入ったものの意。声聞(しょうもん)の修道階位、四向四果(しこうしか)の中の初位で、三界の見惑(分別によって起す知的

なまよい)を断じつつある位を須陀洹向(見道)といい、断じ尽した位を須陀洹果(修道)という。

はい、ここまで親鸞聖人が、七祖を受けたご自分の感動を述べられました。ちょっと訳しましょうか。これまで七祖で勉強してきてわかったでしょう。

真実の行信、南無阿弥陀仏と南無阿弥陀仏の信心を獲れば、心に歓喜が生まれてくる。これを歓喜地と名づく、龍樹が初歓喜地と言いました。歓喜と言いましても、いいですか、仏法に目覚めた喜びです。宝くじが当たった喜びではありません。だからここで真実の行信を獲れば龍樹だったら空の覚り、世親だったら能令速満足 功德大宝海と言う如来の世界、浄土が開かれた。だから歓喜が大きい、それを歓喜地という。大乘の菩薩道だと初歓喜地という。そういう歓喜をいただくことができた。これを初果に喩えることは、小乗仏教の阿羅漢に喩えると、小乗仏教の阿羅漢の聖者でも、この初果を獲れば、どんなに寝ていようと、どんなにだらだらした生活であったとしても二十九有には必ず涅槃の覚りに入る。こういう意味です。

ですからここは親鸞聖人が大乘の菩薩道の初歓喜地を獲たのだということと、小乗の仏教でも阿羅漢が覚りを獲たのだと言うことと一緒なのだ、こういう意味で二十九有に至らずと、こういうふうに言われます。「いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず」。これが大事ですね。念仏の信心、念仏の行信を獲れば、大きな大悲の中にあると、浄土教ではそう言いますね。摂取して捨てたまわず。この大悲の摂取、これは涅槃の覚りそのものですから、浄土教では覚りとはあまり言わないで、仏様の大悲の中にあるとこういうふうに言うのですが、これも私たち一人一人がこの世では、言わんでもわかるでしょう。だんだん心細くなるでしょう年がたって、二人とも元気でも、いつかどちらかが亡くなるかもしれない。僕もそうです、だんだん年いって来て、ぼけて来て、もう80歳もなったら、皆さんの前でお話できるだろうかと不安になってくるのです。孤独で寂しい、ところが南無阿弥陀仏を称えた時には大きな仏様の大悲の中にある。みんな一緒に大悲の中にあるのだという目を開く、大悲内存在。これがさっき言った同一念仏してという、あの文章で言うと、阿弥陀如来の正覚浄華の化生するところと同じことを言っているのです。

それを浄土教的に表現すると「摂取不捨」と、大きな仏様の覚りの中に初めてあるということに目覚めた。そして孤独で不安のものを何とか頑張って生きていこう。友達のところに行って聞法をしに行こう、頑張ろうと、こうはげましあって生きていくものになっていく、それは大悲の中にあるという、こういう大きな目覚めをいただくからです。浄土教ではそういうのです。ですから「いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると」。だから阿弥陀如来だけが十方の衆生を救うと誓って下さっている仏様だから、十方群生海を大悲に収めて阿弥陀であることを証明した。だから、これこそ阿弥陀と名づけたてまつる。そしてこれを他力と言うのである。実に明快だと思いませんか。わかりますね、難しいですか。

このように七祖が一人ずつ獲たように、わたしたちも真実の南無阿弥陀仏の信心を獲れば、念仏を獲れば心に初歓喜地の菩薩と同じように仏教が開かれた。こういう歓喜をいただく、それは小乗の阿羅漢が覚りを悟るのと一緒なのだ、だから十方群生海。ところが修行して立派になるのではなくて凡夫のままで南無阿弥陀仏の行信に帰命すれば大きな大悲の中に生まれて、大悲に捨てられない摂取不捨の利益を受ける、だから阿弥陀仏と名づけたてまつる。これを他力と呼ぶと言うふうに親鸞聖人がご自分の言葉で、七祖の覚りをこういう形でまとめられました。よくわ

かりますね。浄土教で言えば摂取不捨というのだ、大悲に救われると言うのだ、こういう意味です。そしてそれを受けて、皆さん読んでみましょう。190ページ、

「ここをもって龍樹大士は「即時入必定」(易行品)と曰えり。曇鸞大師は「入正定聚之數」(論註)と云えり。仰いでこれを憑(たの)むべし。専らこれを行すべきなり。

良(まこと)に知りぬ。徳号の慈父ましまさずは能生の因闕(か)けなん。光明の悲母ましまさずは所生の縁乖(そむ)きなん。能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識(ごっしき)

(註3.)にあらずは光明土に到ることなし。真実信の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母、これすなわち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。かるがゆえに宗師は、「光明名号をもって十方を摂化したまう。ただ信心をして求念せしむ」(礼讃)と言(のたま)えり。また「念仏成仏これ真宗」(五会法事讃)と云えり。また「真宗遇いがたし」(散善義)と云えるをや、知るべし、と。

おおよそ往相回向の行信について、行にすなわち一念あり、また信に一念あり。行の一念と言うは、いわく称名の遍数(へんじゅ)について、選択易行の至極を顕開す。」

註3:世間一般では、父母によって子が生まれるとっていますが、実際は父母の精血の和合したところに、その人の前世の業の果報として、その人となるべき自我意識(業識)が宿り、父母を縁としながらも、父母とは違った独自の人格が生まれてくるというのが、部派仏教などで考えられていた業報説による個体発生論だったわけです。

このように、譬えとして用いられた父母と子どもとなるべき業識とは、明らかに別体とみなされていたわけです。しかし、この譬えで表されている信心と名号とは、機と法の違いはありますが、決して別物ではありません。一つの南無阿弥陀仏を機(救われるものの側)からいえば信心といい、法(救うものの側)からいえば名号であるというような関係にありますから、名号と信心とは、体は一つです。

したがって信心を業識とし、名号を父と譬えた場合、名号と信心が別体とみなされるおそれがありますから、この父と業識の譬えは一分の譬えとして用いられたもので、譬えと法義がまったく重なるものではないことを注意しておく必要があります。

ここまでが親鸞聖人のまとめの文章であります。そしてこの行の一念の文章として、皆さんよくご存じの、

「かるがゆえに『大本』(大経)に言わく、仏、弥勒に語りたまわく「それ、かの仏の名号を聞くことを得て、歡喜勇躍して乃至一念せんことあらん。当(まさ)に知るべし、この人は大利を得(う)とす。すなわちこれ無上の功德を具足するなり」と。」

と言って弥勒付属の乃至一念を顕す文章をここに挙げています。いいですね、これはよく見るとわかるでしょう。「歡喜勇躍して乃至一念せん」というのは、「信心歡喜せんこと乃至一念せん」(第18願、本願成就文)と言うのと同じですね。だから行信不離ですから、「歡喜勇躍して乃至一念せん」は行の成就文、「信心歡喜せんこと乃至一念せん」は信の成就文、その二つは離れない。いっしょのことを言っている。だからここは行の巻ですから弥勒付属の行の一念釈を経証、経典の証明として、経証と言うよりもお釈迦様の経典の証拠として、ちゃんとこういうふうにお釈迦様が説いてくれているでしょうと行の一念の文章を上げる。こういう形になっています。言葉がちょっと難しいけれどもわかるでしょう。

いつか皆さんとここで両重因縁の善導大師の文章についてお話をしたことがありましたね。ですから親鸞聖人はくどいようですが、さっき、しかれば真実の行信を獲れば大乘菩薩の初歡喜地を得るといふことと、それから小乗仏教の阿羅漢の覺りを得るといふのと同じ感動をいただくの

だと、私たちの十方群生海が南無阿弥陀仏に帰命すれば大悲の摂取の中に捨てられない、大悲を受ける。こういう世界が開かれるのだと、だから阿弥陀と名付けるのだと、これを他力と言うのだというふうに七祖の方々がみんな涅槃の覚りを説いてくださったけれども、それは浄土教的に言えば摂取不捨という。こういうふうにまとめられました。

そのうえで、それを受けて龍樹は信心によって空を得る。その菩薩を「即時入必定」と教えてくださった。曇鸞は「大乘正定の聚に入る」と教えてくださった。というふうに龍樹と曇鸞を上げます。親鸞聖人はいつもこの龍樹と曇鸞を上げますので、これは大変大事なのですが、ここで言うように空の覚りを得て、そして信心によって空の覚りを得て必定の菩薩になる。これは現生不退、今ここで信心をいただくと空の覚りが開かれて、今、ここで不退転に立つ。死んでからではありません。龍樹はね。親鸞聖人までの浄土教は死んでからと言うのが多いのです。そして死んでから浄土に生まれて、浄土で覚りを悟るのだとこう言うふうに浄土教は教えるのです。それは確かにそう言っているのです。だから『観経』では覚りを悟ることができないから、命終わるときに仏様の方から来迎してくださる。こういう言い方で、この世で命終わって、浄土に生まれて浄土で覚りを悟るのであって、この世で煩惱を持った身が覚りを悟るのではないと言うことを強調するのが浄土教ですから、ですから、浄土教の言い方からすると命終わってからと言う、こういうことを強調するのです。

ところがそれに対して『大経』はそうではないのだ。信心、他力の信心は、これは前から言っているように覚りが開かれた心である。他力の信心は私たち人間の心ではない。仏様の本願が信心にまでなってくくださったのだから、その信心は仏様の世界をすぐ開くのだ。大涅槃が開く。

この間、豊前の京都（みやこ）組、お東で言うと、4～5日前でしたか、行橋市の方ですね。その坊守さんたちの会で『歎異抄』の話をしていて、やはり、真宗が難しいところは他力の信心と言うものがどういうものかと言うこと、特に自力が間に合わないということ、頭が下がるということ、その自力が間に合わないと言うのが、その世間の私たちの考えと違うから、そこがなかなか難しく、わかりにくいところなのです。だけど親鸞聖人の言うことをよく聞いていると、そういつているのです。この間、『歎異抄』を読みながら、『歎異抄』の信心同一の問答と同じ問答が『御伝鈔』に引用されているのです。東聖典729ページ（西1050、島31-5）、

「**聖人 親鸞 のたまわく、いにしえ我が本師聖人の御前に、聖信房、勢観房、念仏房已下の人々おおかりし時、はかりなき諍論をし侍る事ありき。そのゆえは「聖人 源空 の御信心と、善信（親鸞）が信心といささかもかわるところあるべからず、ただ一（ひとつ）なり」**

これ皆さん知っていますね。信心同一の問答でも同じことが議論になりますね。ところが、この『御伝鈔』の方はよくわかるように、親鸞聖人が言うのです。その3行後、「**「なかかひとしと申さざるべきや。」** どうしてひとしいと言うのか、「**そのゆえは、深智博覧にひとしからんとも申さばこそ、まことにおおけなくもあらめ**」、その理由は法然上人の学識が深いとか、能力があるということとひとしいと言うのならば誠に申し訳ないことである。つまり法然にはとても及ばない。学識とか能力と言うことから言えば、法然には及ばないから、そんなことがひとしいと言っているのではない。そういうことではなくて、「**往生の信心にいたりては、一たび他力信心のことわりをうけ給わりしよりこのかた**」、ひとたび、他力信心が起こってから、ずっと全く私なし、自力でないから、他力信心が起こったというのは自力無効と言うのを知ったわけだから、だから「**一たび他力信心のことわりをうけ給わりしよりこのかた、まったくわたくしなし。しかれば、**

聖人の御信心も、他力よりたまわらせたまう、善信が信心も他力なり。」

ここでは親鸞聖人の方が、法然上人の信心も「他力よりたまわらせたまう」と言っている。これが大事なのです。

信心同一の問答の方は、皆さんよく知っているように最後に、「それでは法然上人を呼んでみよう」とこうなっています。法然上人を呼んだら、法然上人が「私の信心も如来よりたまわりたる信心である。善信も如来よりたまわりたる信心である。だから一つなのだ」と、「もし信心が違うというなら、それは他の浄土に生まれるでしょう」と言うように法然が言うのです。

ところがこの『御伝鈔』をみると「しかれば、聖人の御信心も、他力よりたまわらせたまう」と親鸞が先に言っている。こっちの方が本当だと思います。「他力よりたまわる」とか、「如来よりたまわる」というのは、本願力回向という思想です。それは『大経』しかありません。だから、前から言っているように親鸞は若い時から『大経』の仏教者だったから、親鸞の方が先に言っている。ここでは、これの方が本当だと思います。同時に「一たび他力信心のことわりをうけ給わりしよりこのかた、まったくわたくしなし」、これが大事です。自力無効と頭を下げたのだから他力の信心には、私たちの私心、能力、資質そんなものと一切関係ない。これはやがてこれから信の巻を勉強するとわかる。至心・信樂・欲生と誓った本願が実現したのだと、こういうふうに証明するのが三問答です。ですから、これは全く私なしと言うのですから、如来の心である。衆生の信心は仏様の心なのだ。だから仏様の世界は自然とそこに開かれて当然なのです。こういうことを信の巻で証明していくことになります。

わかりますね、ですから、ここで龍樹が「信心によって空の覚りを開くのだ」と言ったことと、「他力の信心によって涅槃の覚りを開くのだ」と言ったこととは同じことを言っているのです。そして、死んでからということではなくて龍樹は現生不退、今、ここで獲ると言った。これが大事です。それに対して世親菩薩は、空の覚りと言ってもわからないから、私たちに、空の覚りとは何と言っても、「いやーからっぽ」のことと言っても「違う」と言われ、「それは違う、それは違う」と言われるのだから、何のことか訳がわからない。だから、ちゃんとよるべき如来の真実の法を明らかにしましょうと言って、空の覚りの内容を「浄土の莊嚴」として明らかにしてくださった。空の覚りが根拠になっている、大涅槃の覚りが根拠になっている。

浄土の莊嚴、これが根拠にあって浄土が建てられた。これは前に何回も言った。法身は色もなし形もましまさず、その法身から法蔵菩薩が方便法身として出てきて、二十九種の本願を建てて浄土莊嚴したのだと書かれている。そして元は空の覚り、大涅槃の覚り、どっちともこれは法身、この法身を私たちに手渡すために法蔵菩薩は四十八の本願を建てて、私たちでもわかる浄土の莊嚴として明らかにしてくださった。だからこの浄土の莊嚴は、実は、元は法身・覚りそのものである。こういうことになりますね。ですから龍樹は空の覚りに立って、菩薩が信心によって自利利他を実現する。わかりますね、みなさん、この世では自利利他が実現しない。

僕は、ほんと自分のことを言うと恥ずかしいですが、若い時からわがままなことばかりして生きてきて、うちの奥さんはえらかったよ、一言も文句を言わずに僕を支えてくれて一生懸命に生きてきたのだね、だから白血病で死なれたら私はかなわんと思って、今度はつらかったけれども助かったからよかったけれども……。この間、青木玲先生が来て、ちょっと酒を飲んでいて。終わってから「わしは、若いころ悪いことばかりして済まん事をした」と言って、なんであんなわがままなことをしたのかね、若い時から、自分の思いがわっと出てくるとそれを実現しないと僕

はどうにもならなかったのだと思う。

それがいい方にはたらいたということからいうと、親鸞聖人の仏教がわからないと私は死んでも死にきれないと思って頑張った。けどこの世で生きること自分の中から出てくることについてもなんかも全部実現したいと思って生きてきた。だから、周りの人にみんな迷惑をかけた。もうあんまり言わなくてもいいでしょう。恥ずかしい、そんなふうに自利利他がなりたない。

ある一人の人がわがままに生きると、奥さんが苦勞するし、だから、今度は、僕は白血病から帰って来てから、一生懸命にわしはやっているよ。本は書かなくてはいけませんが、掃除、洗濯、今でも朝飯を作って食わして頑張っています。時々しんどいと思う、奥さんのためにすると今度はこっちがしんどくなる。なかなかうまいこといかんと言うことは、やはりこの世に生まれてきて、せっかく生まれてきたのに共にあると言うことはできない。それが問題です。せっかく一緒に生まれてきているのに仲良くしたらいいのに、そうはならない。そしていつも上か下かを争って喧嘩になる。自利利他が成り立たない。それは人間の自我があるからです。

だからその自我を超えた覚りに立ちなさい。空の覚りに立って自利利他を実現しなさい。これが菩薩道の基本なのです。だから空の覚りに立って菩薩になるのだと、これが龍樹が言っていること、同じことを世親は浄土によらないと自利利他は成り立たないのだとこう言っています。如来の浄土によらないと何が本当に自利なのか、本当に人間にとっていいことって何、自利利他と言うのはそういうことでしょう。本当に自分にとっていいこと、本当に他人にとってもいいことって何、それは何、わからないでしょう。

昨日、言っていたのです奥さんと。あれは白血病で助かったけれども、弱っているのです。心配なのです。何か出てくるのではないかと、だんだん弱ってくるのではないかと、あの時に死んでいたらよかったのになあと、「とうちゃんごちゃごちゃ言っているが先にころっと死んだらどうかと、かあちゃん未だ生きていてボケたらどうもならんな」と言っていたら、「私そんなになりたくないし」と言っていたけれども、とそう言うことで、何がいいか悪いかわからない。本当に人間にとって自利とは何なの、本当に他人にとっていいことって何なの、まずそれがわからない。だから龍樹は空の覚りに立てと言ったけれども、世親はそれがわからないから、それを教えるのが浄土だと言ったのです。

如来は真実だから、如来が建てた真実の浄土は、私たちはわからなくても、本当に人間にとっていいことは、それは浄土に生まれていくことです。他人にとってもいいこと、それは浄土に生まれていくと言うこと、それしかない、仏様がそう言っている。それは私たちは信じられない。私たちは宝くじでも当たったらいいのではないかと、一緒に旅行したらいいのではないかと、そんなことを思っているが、病気が治ってよかったと思っているが、それはひょっとしたら悪いことになるかもしれない。そんなふうに本当にいいことと本当に悪いことが人間にはわからない。

世親が偉いのです。菩薩であった世親が、「私はそれがわからないのです。ところが如来の浄土に帰依してはじめてわかった。私がわたしになることです」と、浄土に生まれることというわかりにくいとすると、比べるということを超えるものになりましょう。僕がいつも言うように「比べると」ということを超えるものになる。仏様の世界は青い色は青い光を出し、赤い色は赤い光を出すと書いてあるでしょう。だから比べるということを超える世界が仏様の世界だと言うことです。そして比べるということを超えるということは、誰とも比べなくていいのですから、私がわたしでよかったといえる世界をいただくことができるのが浄土だと、この世でどんなに夫婦

であろうと子供であろうと孫であろうとなんであろうと、とにかく浄土と言うことによってお互いに比べなくていいもの 私がわたしでよかったといわれるものになること、それが実は自利利他のだと教えたのが世親菩薩です。わかりますね、人間の方からは絶対に出てこない。

仏様の浄土から出てくる言葉、浄土に生まれて初めてわかった。私がわたしになればいいのだ。僕がそう思った。自分の先生に遇って、それまでは私は金持ちになりたかった。有名になりたかった、いい大学に行きたかった。それで苦しんだ。死のうと思った。けど、先生の教えに遇って初めて「ああ、私はわたしになればいいのだ。金なんかどうでもよかったのだ。私がわたしになればいい」と、仏教の教えを聞いて「私がわたしになっていこう」、そして娘も家内も、この世では奥さんとか娘とか孫とか言う関係だけど、全部ひとりずつ仏様の子供だという見目が生まれて、みんなそれぞれ比べないでいいものになりなさい。それが人間の自利利他と言うものですと、こういってもいいです。そういう世界を浄土が開くのです、と言うふうに世親菩薩は言ってお下された。

だから曇鸞大師は、浄土の莊嚴に支えられて必ず仏になっていく正定聚になった。他力の信心をいただいて、初めて人間の世を超えて、大きな仏様の世界・海のような世界に目を開いた。だから必ず仏様の世界に帰って行きたいというものになっていきます。それが正定聚です。仏様の世界が開かれなければ、この世のものしかないから、やはりなんや言うても金があった方がいいとか、名誉や地位があった方がいいとか、それからごちゃごちゃ難しいことを言わなくてももうまいものを食べて、そしてころっと死んだらいいのではないかとかいうふうになっていく。それと違って、どうなろうとガンになろうと病気になろうと「ガンもいただいたものであります。生きることも死ぬこともいただいたものであります。私はわたしでほんとうによかった」と言って、自分の人生に手を合わせて、私の先生は亡くなって行った。そこに浄土が開かれた人の人生がちゃんとある。それを正定聚と言うのだと曇鸞が言ってお下された。

そうすると、こう覚えてください、『観経』は、浄土に生まれて不退転を獲ますよと、龍樹は今、不退転を獲ますよといいますが、こう言った。だからこう覚えてください。『観経』の浄土は、浄土教の凡夫と言うところに重きがあるために、死ぬまで煩惱の身が消えないから、命が終われば必ず仏様が迎えに来てくださるよと説いたのです。これが『観経』の浄土です。だから『観経』の浄土は死後です。

ところが『大経』の浄土は信心が起これば、そこが穢土であっても浄土が開かれるのですと、そして必ず浄土に生まれるものになっていくのです、と言うのが『大経』の浄土だというふうに考えてください。親鸞聖人まで、つまり道綽、善導 法然までは『観経』の浄土教だったから、死んでから覚りを獲るのだと、こういうことが日本でも強く言われてきた。それを、今のここに人間の救いがある、ただし浄土を悟ってしまったとか空を悟ってしまったとか、浄土に生まれてしまったとか言うわけにはいかない、煩惱の身があるから、けど信心はちゃんと浄土を開くのだと言うのが『大経』の浄土です。そんなふうに理解をしていただきたい。だから信心に、今、空の覚りが開かれるのだと言うことと、信心によって正定聚に住するのだと曇鸞が言ったことと同じことを言っているのです。こう言って死んでからの覚りを今の覚りに置き換えた。それが親鸞聖人の大きな仕事だというふうに知っておいてください。

いいですね、僕が言っているのではないです。書いてある通りに言っているのです。僕が言っているのとは違います。書いてある通り言っているのです。親鸞聖人はそう言っているでしょ

う。龍樹の「即時入必定」と曇鸞の「正定聚に住する」ということと一緒だ。それが。私たちが信心によって覚りをいただいたという感動なのだ。ただし『大経』は、それではお前は覚りを悟ったのかと言ったら、凡夫でなくなるから、聖道門になってしまうから、そうではなくて 覚りは悟ったのではなくて、海のような覚りの大きな大悲の中に生まれたのです。けど身が凡夫だから、死ぬまで凡夫の身は変わらないから、だから浄土に生まれていこうという歩みは、この煩惱との戦いになりますよ、こう意味です。

ああ恥ずかしいなと思うでしょう。さっき言ったように、私は若い時わからなかった、わがままばかりで勝手なことばかりして、恥ずかしい。一つだけ言おうか、うちの奥さんは公務員で働いて食わせてくれていたのです。その時に亡くなった平野修先生、亡くなった中川皓三郎先生、あの二人は同じ年、私より5歳上なのです。けどいつも一緒にいたから、うちの奥さんが給料を貰ってきたら、内に集まって飯を食う。ルンルンで来る。そこまではまだいいは、初めてボーナスをもらったのです、奥さんが。今から考えたら奥さんも買いたいものがあったら。私は、そのお金を全部使ってしまった。一銭も残らず。ああ悪いことをしたと思って、あれ死ぬ時に閻魔さんの前に行くと言うでしょう。あれほんと、自分の死期が近くなると、自分のしたこと思い出して夜寝られないのです。あんなことしなければよかったと思って、まあ恥ずかしい、恥ずかしいと思って寝られない。けど、これな、仏教を勉強したおかげと思う。仏教を勉強しなかったらずっとわがまままで終わっていたと思う。ほんと、我を張るだとか、自分の煩惱をつのらせるな、貪、瞋、痴の煩惱を少しでも超えていきなさいというふうに教えられて初めて、ああ恥ずかしい生き方をしていたなあとと思う。それが願生浄土の歩みになってしまう。仏様の世界に向かっていく歩みになってしまう。だから、反省してあ一悪かったなあとすることはもうしないように頑張らないといけない。

けど、反省しても反省してもどうしても超えられない時には本願の信心に立ちなさい。本願に立ちなさいとお釈迦様はちゃんと言っているから、そうやって「一心帰命」と「一心願生」と二つ分けて説いている。『大経』は分けて説いている。ちょっと言いかけたからもうちょっと言うは。この間、青木玲先生(九州大谷短大准教授)に、あの先生は私の教え子なのです。「あ、玲、俺が死ぬ前にお前に言っておいたこと忘れるな、いいか」と言ったのは、もともと『大経』と言う経典しかなかったのです。一番古い経典は『大経』なのです。そうですね、後に『観経』と『阿弥陀経』ができてきたのです。それは実は一心帰命と言う、自力から他力へという翻り、これをテーマにして説てきた経典が『観経』です。だから、私たちのこっちから見ると『大経』にここは(帰命)『観経』の教えに核心があるよ、願生のところには『阿弥陀経』の教えの核心があるよと、このように解説するが、親鸞はそうではないと。親鸞は『大経』のここ(帰命)が『観経』になった。『大経』の最後が『阿弥陀経』になった、と読んでいる。だから『観経』と『阿弥陀経』は『大経』から生まれたのだと、死ぬ前にあの爺が言っていたと忘れるなと言ったら、「今度書いたらどうですか」と言うから、「まだ時代がはやい」と言った。

だって、そういうことを言うと、どこに根拠があるかと言うに決まっているのだから、文句を言うやつばかりがでてくる。けど、絶対そうです。『大経』の自力から他力へと言うところが『観経』になった。そして今言う煩惱を超えなさい、そして願生しなさい、往生しなさいというところが『阿弥陀経』になったのです。だから反対なのです、僕らと。『観経』と『阿弥陀経』が『大経』にそなわっているのではなくて、もともと『大経』が『観経』に展開し、『阿弥陀経』に展開

したのだと親鸞はそういうふうには読んでいて、死ぬ前に言っていたと覚えておいてください。ちょっと休憩します。（休憩）

講義 2

それでは、もうしばらくお話をさせていただきます。『教行信証』を読んでお祈りして親鸞と言う方は徹底的に『大経』の仏教を明らかにしていると言うことがよくおわかりでしょう。『大経』、『大経』と申しますけれども、何度も申し上げますが、もともと『大経』と言う経名はありません。『仏説無量寿経』、これが『大経』の『大無量寿経』の正式名称です。ですから親鸞は、ものすごく言葉に厳格な文献学者でもありますから、経典を平気で変え得ると言うことはあり得ない。なのに『仏説無量寿経』を『大無量寿経』と最初から最後まで、どこにも一片の間違ひもなくそう言って表すのです。

それは字から思えば大きな『無量寿経』、『観経』と『阿弥陀経』を包んだ大きな『無量寿経』と言うところまでは、私はさっき申し上げてきましたけれども、しかし『教行信証』をずっと読んでいて、そうではないのではないかと、宗祖は、自力から他力へ、十九願から十八願へとと言うところが展開して、やがて『観経』が生まれたのだと、それから自力から他力に帰した凡夫は、身が凡夫だから死ぬまで煩惱が消えない。その煩惱が何とかして仏になろうと思うて頑張る、ぼくらは、だからみなさん、こうやってお忙しいのに来てくださって一生懸命に仏教を聞いて、朝晩勤行して、花を立てて 香をたいて一生懸命仏さんになりたいと思うでしょう、自然と。

ところが仏にするのは仏の仕事だから、俺が頑張って仏になろうとどこでどう勘違いしたのだ、「仏さんの仕事を盗むな」と、仏にするのは俺なのだから、だからお前は煩惱の身なのだから煩惱の身にちゃんと帰りなさいと。群萌の一人に帰りなさい。その代わり大悲に摂取して捨てないと、これは阿弥陀でしょうと言うことを明らかにするのが『大経』の二十願と十八願との関係、それが『阿弥陀経』として展開していくのです。と親鸞は見えていたと思う。『教行信証』を読んでいるとそうなっているのです。まあ、爺さんが死ぬ前にそんなことを言っていたと、皆さんの方が先に死ぬかもしれないが。

『教行信証』を読みますと、そういう風情があります。ですから『観経』による領解を『教行信証』はしないこと、やはり『大経』の覚りを獲るのだと、一心帰命のところでは「帰命尽十方無碍光如来」、如来と関係している。如来の覚りを得るのだと。それが『観経』、十九願、自力から他力への展開、一心帰命と。ところがいったん覚りをいただいても凡夫だからと言って、もう一度、今度は願生浄土と言うところの問題がある。ここはまた後で、『大経』では後で展開することになりますが、そういうふうには二つに分かれていることを分けて考えないと。ですからここは名号に帰命すると言うところだから、一心帰命と。だから覚りを獲るのだと言うことを一生懸命親鸞は言っているのだというふうにご覧ください。

いやいや煩惱の身だから覚りを得ると言っても凡夫の身でしょう、と言うのをここで言うことやこくなる。ここでは言うてはいけない。それは願生のところでもう一度問題にしますと、こういうことになります。いいですかね。だからちょっと違和感があるかもしれませんが、一心帰

命、帰命尽十方無碍光如来 願生安樂国、ここは浄土の関係になります。それで、今、『大経』では龍樹が信心に空を得る、覺りを得る不退転と言うことと、曇鸞大師が浄土に生まれて正定聚に住すると言うこととは、これみんな同じことです。こういうふうに言った。

そして、そのあとに善導大師の両重因縁の喩えが出てきます。これは前に一度申し上げたことがあります。なぜ、ここで両重因縁の喩えが出てくるのか、しかもこれは善導大師の喩えでしょう。そうすると、今、私が申し上げていることから言うと『大経』ではなく『観経』に立った善導大師の喩えですね。その中に、しかしちゃんと善導大師が『大経』の信心を内因、こういう言葉で押さえていると言うことを指示するのが、この両重因縁の大切な意味です。ちょっと読んでみましょう。東聖典190ページ(西187、島12-37)、皆さんと一緒に、

「良(まこと)に知りぬ。徳号の慈父ましまさずは能生の因闕(か)けなん。光明の悲母ましまさずは所生の縁乖(そむ)きなん。能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらざは光明土に到ることなし。眞実信の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母(ぶも)、これすなわち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の眞身を得証す。かるがゆえに宗師は、「光明名号をもって十方を摂化したまう。ただ信心をして求念(ぐねん)せしむ」(礼讃)と言(のたま)えり。また「念仏成仏これ眞宗」(五会法事讃)と云えり。また「眞宗遇いがたし」(散善義)と云えるをや、知るべし、と。」ここまでです。

これをさっと読んでわかるでしょう。難しいですか。善導大師は「徳号の慈父」、名号を父とし、「光明の悲母」、光明を母とする。名号と光明、これ、本当は皆さんが聞きなれた言葉でいうと、光明無量・寿命無量と言っています。昔の言葉で申し上げますと、寿命無量の方は体、本体の体。光明無量の方は用(ゆう)・はたらきですから、ここでは善導大師が名号、これは体です。名号がなかったどうにもならないのだから、名号が本体に決まっているから、名号と言うものの中に寿命無量を収めていると書いている。どちらも体だから、そして名号のはたらきはなんと言っても光明として、私たちの分別を破っていく、だから光明無量の方がはたらきなのだ、父と母のはたらきによって子供が生まれてくるのだと。ところが能生の因縁、生まれてくる方と生む方の因縁が和合したと言ったとしても、「信心の業識にあらざは光明土に到ることなし」と言うふうに、「信心の業識」、これ分かるでしょう。父と母がいたとしても子供が生まれてくるのでしょうか。生まれて来る子供の方の因がなければ生まれようがない。父と母だけいても生まれることはない。だから子供が生まれると言うことは子供の方の原因がなければ生まれません。だからそれを「信心の業識」、「信心の業識にあらざは光明土に到ることなし」。眞実信心の業識、これすなわち内因とする。

皆さん一人ひとりの内から信心が生まれてくる。だから『大経』の信心は内因である。それに対して『観経』で説かれる光明名号と言われる名号のはたらきは外縁である。縁、そう書いてあるでしょう。「眞実信の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母」、光明と名号の父母、「これすなわち外縁とす」。父と母は外縁である。外縁とする。内外の因縁、外からの外縁と子供の内から生まれてくる内縁と、この二つが合わさって、「内外の因縁和合して、報土の眞身を得証す。かるがゆえに宗師は、光明名号をもって十方を摂化したまう。ただ信心をして求念せしむ」。光明と名号があっても、それは外縁だから、『観経』は光明名号を説く、それは外縁として大変大事なのだ。

だけど『大経』で説く内因としての本願成就の信心、私たち一人ひとりの命の深いところに働

いている本願が、やがて時期を待って、自力ではたすからなかった時に初めて内から「わが名を称えて我が国に帰れ」と、ずっと呼んでくれている声があった。それに背き続けていたから実は苦しかったのだということがわかる。苦しいのは苦しい原因が娑婆にあると思っているでしょう。確かにそうです。病気になったら病気が悪い、病気が問題です。病気にならなければよかったとしか考えられない、人間は。しかし「病気は仏様にいただいたものです。」と僕の先生(松原祐善師)はそう言っていた。「全部仏様に原因がある。この世に私があるわけではない。仏様の思し召しでこうなったのです」。こう言っていました。

「私は病気と言う病気はみんなしました」と言って、先生は亡くなる前に、「延塚さん、病気と言うのは無記なのです」と。無記と言うのは、そもそも病気に意味はない。いいとか、悪いとか、つらいとか苦しいとか、そんな意味はないのだと、その無記の病気に辛いとか苦しいとか言っているのは、それは私が言っているのです。言っている私の方に問題がある。それに人間は気付かないから、いやいや前に言ったでしょう、「なんで私が白血病になったのか」「絶対になんで私が白血病になったのだろう」。奥さんがそう言うから、僕はこんなふうに偉そうには言えないが、先生は「病気と言うのは無記だ」と言った。無記と言うのは意味がない。意味がないものをなんで私になったと「なんで私が」と言って苦しんでいるのはお前の勝手やからと先生は言ったと、そして「ガンもいただいたものです」と言われたことをお前も知っているでしょう。「なんでそんなことが言えたのでしょうか」と言った。「それは、仏さんの世界に目を開いていたからではない」と言った。「そうだね。仏教と言うのはやはり恐ろしいね」と家内が言っていた。ここまでのことしか私は言えませんでした。

けど、言っていることはわかるでしょう。私たちが苦しんでいるのは勝手に苦しんでいることが多い。自分の勝手に、後でよく気が付くと仏さんに背いていたから苦しんでいたのだと言うことがわかる。仏様の「わが名を称えて我が国に帰れ」と言う。そういうはたらきがずっとあるでしょう。人間の中に、時には、それが、こんな自分でいいのだろうかとか、もっと立派なものになろうとか。がんばってもっといい人になろうではないかという形で現れることもある。スポーツでオリンピック選手になろうとして現れることもある。政治家になって田中角栄のように立派になろうと言うことで現れることもある。しかし全部なったとしてもそれで救われぬ。結局、田中角栄はアルコール中毒(依存症)になって、よれよれになって死んでいった。

それは何だったのか、それは浄土に生まれて来いという呼び声だったのだと言うことを、どこかで教えてもらって、仏法に目覚めていって、聞法をして「そうだ」と言って結着がつかないと思えない問題です。だと思えます。気が付かないかもしれませんが、皆さん一人ひとりの命の深いところから、まあ言葉がないから経典の通り言うけれども、「わが名を称えて我が国に帰れ」と言っていたのです。あの時に、ばかなことを言ってすみません。若い時は好きな人が出来たりと言って狂って、皆さんは狂わなかったですか、私はすぐ狂う、狂っていたが、よく考えみたら、やはりこの人とひとつの命を生きたい、本当にわかり合いたい、共にありたい、仏様の本願があったからあんなに狂っていたのです、と思えます。

根源は仏様が「わが名を称えて、我が国に帰れ」と言っていたのです。金に狂うこともあるし、地位に狂うこともある。名誉に狂うこともある。苦しいことがいっぱいある。全部しかし、仏様が「わが名を称えて、我が国に帰れ」と言っている呼び声が一番奥にあったと言うことがわかったら、その人は救われる。そういうものです。だから内因、『大経』は、本願が内から「わが

名を称えて我が国に帰れ」と言う本願招喚の勅命は、私たちの内から破ってくる。内から私たちの自我・自力を破ってくる。その内因、それが人を本当に救うのだと言うことを、実は『観経』に立った善導大師でもちゃんとやっているでしょう。というのがこの両重因縁の喩えです。

『観経』一辺倒だったら、外縁だけで終わる。光明名号で救われるのよと、ほとんどの場合はこう言っているわけです。善導大師は、念仏一つでいい、これは法然の言い方です。ところがそうではないのです。お二人とも実は、『大経』の内因、うちから本願が破ってきた。その内因ということを『観経』に立って善導大師でもちゃんと抑えているでしょう。だから、ここに善導大師は『往生礼讃』で「光明名号をもって十方を摂化したもう」、これが『観経』の外縁です。ところが『往生礼讃』では「ただ信心をして求念せしむ」、内因としての信心、これが大事なのだと。

『往生礼讃』とはわかりますか、『往生礼讃』とは、『往生礼讃』とか『法事讃』とか、それから『般舟讃』とかあるね、善導大師は。『往生礼讃』は『大経』の書物です。『法事讃』は『阿弥陀経』の書物です。ですからここに『往生礼讃』では「光明名号をもって十方を摂化する」と、「ただ信心を求念せしむ」と、『大経』の信心をちゃんとおさえているでしょう。『往生礼讃』ではそう言っているでしょう。『大経』を説いた『往生礼讃』ではそう言っているでしょう。親鸞が言っているのです。ですからそういう意味で、この両重因縁の喩えは、この文脈からいうと内因・信心の業識、『大経』の信心が大事だと言っているのです。と了解してください。わかりますね、言っていることは、

S 氏の飛び入りの質問・・・先生すみません。名号が父で光明が母と言っているのですが、光明は母と言うのは平たく言うとなんなのでしょうか。

先生・・・そんなものもわからないか、いいか。名号は一つにすれば名号、それを開けば四十八の本願になる。それはわかりますね。四十八の本願によって、名号一つが選ばれたのだから。そしてそれを本願の名号と言う。わかりますね、当たり前ですね。もし本願がなければ修行の念仏になってしまう。だから広く言えば四十八の本願。一つで言えば名号。こういうことになります。

その四十八の本願と言うのは、教えと言うことになります。教えね、僕がここで法話をしたり、皆さんにお話をしたりしているのも教えです。それが光として届くことがある。教えは、阿難のように「今日のお釈迦様の教えは光として届きました」と。光として届くと言うのは、前に何回も言いました、人間が逆立ちをしてもわからないことを見抜かれている、と言うことが光と言う意味。だから地獄の元はプーチンが悪いとか、キム・ジョンウンとかミサイルを撃って、あいつら馬鹿としか思えないのですが、地獄の元はあなた自身にあるのですよと、言い当てられている。ところがそれがわからない、普通は。だからそんなことは信じられないと思って平気な顔をして生きているけれども、親鸞や法然のように救いを求めても求めても地獄ばかりが重なってくるのはなぜか、それは地獄の元が自分にあるからと言うことが初めて届いた。

その時に人間のわからないことを五劫の昔から仏様が見抜いていた。教えが光になった。だから光、名号の体と、名号が本願の教えとして、はたらきとして、言えば本願の教えと言ってもいい、その名号の体と教えのはたらきとが二つ、父と母になったのですよ。名号の体と光名の教え、具体的には教えです。教えが光として届いたときに、私たちは南無阿弥陀仏と頭が下がるのです。と言う意味ですから、光明と言うのは南無阿弥陀仏の教えだと考えてください。具体的に言うと本願の教えと考えるもいいです。

S 氏・・・わかりました、ありがとうございました。

わかりましたか、そういう意味です。だから阿難が「光に遇った」と叫ぶでしょう。あれ、あれは教えに遇ったのです。だから座右の銘にするとか、私の自我を助けるための教え、そういうものではなくて、自我を超えて人間の馬鹿さ加減を見抜いている。だから『歎異抄』の九章では、「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」（東聖典629頁、西836、島23-4）と言っている。仏かねて、もう昔から、私たちが気付く前から見抜いてくださっていたのです。その教えが届いた時に、単なる教えではなくて光になった。頭が下がる。そこが光明と名号のはたらき。だけど頭が下がったという信心の方がなければ、光明と名号だけでは本当に救われたことにならないから、そうでなくて頭をさげたときに本願が沸き上がってきた。そして本願の世界を開いた。この内因としての信心の業識、これの方が大事だと言うことを善導大師も言っているでしょうと、こう言っているのです。

本来ならば善導大師は『観経』だから外縁しか説かない。その外縁しか説かない善導大師でもちゃんと内縁の信心を言っているでしょう。法然も『観経』に立った仏者ですけれども、二種深信を「生死の家には疑（うたがい）をもって所止（しよじ）となし、涅槃の城には信をもって能入となす」（『選択集』：真宗聖教全書一967頁、西・浄土真宗聖典七祖篇1248）、信心によって涅槃の城が開かれる。ちゃんと『大経』の信心を言っているでしょう。と言うのが親鸞の立場です。だから善導大師でも内因と言うことをちゃんと言っているでしょう。こういうことを言うのです。いいですかね、これでいいかな。

それで僕は何も難しいことを言っていない、ここに書いてあることを言っている。光明名号をもって十方を摂化したのです。救ってくださるのだと。ただ信心によってそれをいただくのだというように『往生礼讃』の中で善導大師もちゃんと言っている。だから浄土教は仏になる覚りは死んでからと言うけど、「念仏成仏これ真宗」（東聖典191頁、西187、島12-38）、念仏する人のところにちゃんと覚りをいただいて必ず仏になる。「今、仏になった」とは言わない。しかし「必ず仏になる」という。そういう自信をいただくから、「念仏成仏これ真宗」。だから真宗はありがたい。努力によって開かれるなら、人間が頑張って開かれるけれども、いくら努力しても開かれないから先生に会うしかない。教えに会うしかない。それはどうしたらいいのかと言われても困る。真剣に求めなさい。それしか言いようがない。

そして時期が熟して、教えが、さっき言ったように、人間が逆立ちをしてもわからないことを言い当てられた、「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば」、つまり煩惱具足の凡夫と思っていないのです。僕たちは言い訳をするときだけ言うのです。「昨日、飲み過ぎた、煩惱があるから」と煩惱具足凡夫と言い訳しながら一度も凡夫になったことがないのです。それをはじめからそうではないかと、だから救われないのです。だから、救いがない救いがないと泣いて、わめいて泣いて、たたいて泣いているうちに、「そうだ、煩惱具足の凡夫と言われていた」と言うことが初めて身に突き刺さる。

曾我（量深）さんそう言っている。新潟に中央から帰って、新潟の雪の中で「私はもう精神状態が持たなくなってきた」、そして、「救われない」と言って、雪の中で雪をたたいて泣いた。雪を食う鬼だった。「食雪鬼」と書いています。雪を食う鬼になった。鬼になったのだから人間の神経はまるでわからない。そこで、「なんで救われないのか」と言ってたたいた。泣いた。たたいて泣いているうちに「煩惱具足の凡夫だから」と仏が五劫の昔から言っていた、と言うことがわか

ったと言うのです。「そうか」、そこから元気に立ち上がった。「凡夫のままで生きていこう」と立ち上がっていった。だから「救われたい、救われたい、何でだろう」とみんなそれで苦勞をする。それを「煩惱具足の凡夫と最初から見抜いていたのです」と言うことがどうしてもわからないから、何とかしようとするから、もう死ぬときはどうにもならないから、死ぬときにわかると書いてある。『観經』に書いているから心配するな、と言う文脈になっているのです。ここは、内因の信心を説くが、実は『大經』なのです。いいですね。

そしてその内因の信心は、言うまでもなく本願成就の信心です。だから、本当はここで「あらゆる衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと乃至一念せん」（本願成就文）、それが出てくると信心になるから、ところがここは「行」だから、本願の信心の第十八願の乃至一念と、行を表す彌勒付属の乃至一念と、それから自力の三輩章の乃至一念と、『大經』には乃至一念が三つある。それは法然が指摘している。今まで言っている。三つの乃至一念がある。

行信不離だから、第十八願の、44ページを開けてごらん、ごめん44ページでなく信の巻を開けよう、信の巻にも信の一念積がある。東聖典239ページ（西250、島12-82）。だから行の巻と信の巻が対応していることがよくわかる。行の一念積と信の一念積は同じこと、行信不離だから。

「それ眞実信樂を案ずるに、信樂に一念あり。「一念」は、これ信樂開發の時剋の極促を顯し、廣大難思の慶心を彰すなり。」と言って、「ここをもって『大經』に言（のたま）わく、諸有衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退轉に住せん、と。」

これは第十八願の信心の成就文ですね。それに対して行の巻、さっきのところ、（東聖典191頁、西187、島12-38）

「かるがゆえに『大本』（大經）に言（のたま）わく、仏、彌勒に語りたまわく、「それ、かの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん。当に知るべし、この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功德を具足するなり」と。」

これは彌勒付属の文章、『大經』の一番最後に説かれる。『大經』の一番最後に、この『無量壽經』で、『大經』で説いた南無阿彌陀仏をあなたに渡します。彌勒に渡しますと。だから、あなたは遠い将来においてもこの南無阿彌陀仏を伝えてくださいと言って、お釈迦様が彌勒に渡すところ、東聖典86ページの最初から6行目（西81、島1-76）、

「仏、彌勒に語りたまわく、「それ、かの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念することあらん。当に知るべし、この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功德を具足するなり。」

これが南無阿彌陀仏の行の一念を付属した文章です。この時に単なる南無阿彌陀仏を付属するのではなくて、「歡喜勇躍して乃至一念する」。第十八願の信心も「信心歡喜せんこと乃至一念せん」、同じ言葉でしょう。こちらは信の成就、こちらは行の成就、どちらもこれは本願成就を表している。本願成就に信心を表している。だからこちらは信の巻に、こちらは行の巻に、行の一念積として表している。こういうことになります。

ですからこの文脈からすると、さっき言った善導大師でも本願の成就の内因が大事だと言っているでしょうと、その内因としての『大經』の信心は、行の一念積「歡喜勇躍して乃至一念する」、信の一念積「信心歡喜せんこと乃至一念せん」、ここに根拠があるのですよと、だからここ

は行の巻だからこっちをあげておきましょうねと、信の巻にはこっちを上げますよと、しかし行信不離ですよと、こういうことを言っていることになる。当然ですね。これは本願の成就の信心が大事なのだというところに結論して終わっていく。当然のことではないですか。ここはみんな「わからん、わからん」と言うのですが、僕はよくわかるのです。だってそう書いてあるのですから、これで七祖が終わっていくのです。いいですか、この結積、親鸞聖人の結積は行の一念積でおわっていく、だから本願成就で終わっていく、七祖は全部本願成就に立ったわけですよ、と終わっていく。いいですね、まちがいないでしょう。

そして後半が東聖典193ページの6行目（西190、島12-40）、「他力と言うは、如来の本願力なり。」という言葉があります。これは大変重要な言葉なのですが、ここから行の巻が二つに分かれていくのです。昔の勉強してきた人たちの学者は、「他力と言うは、如来の本願力なり」というところから「重積要義」という言葉で言いました。一応参考のために。これまで説いてきた七祖の中で一番大切だったのは覚りです。龍樹は空の覚りと言ひ、世親は浄土の覚りと言ひ、曇鸞はそれに立って正定聚といい、覚りですね、その覚りについて、改めてこれから問題にします。

そしてこれは予告編、ここで一番大切な問題はこれ（覚り）だけ。「誓願一仏乗」。これが『大経』の覚りの名前です。本願によって、比べることを超えた一乗に立っていく。誓願という言葉も一仏乗という言葉も、どちらも大乘仏教の言葉ですが、「誓願一仏乗」というのは親鸞が造った言葉です。こういう言葉で浄土教の、名号で開く覚りの内容を親鸞聖人がこれから確かめていくのです。

ですからこの次の会の時に、この「誓願一仏乗」について話をして行の巻が終わっていくことになります。よく3年間もついて来ていただきました。よろしいでしょうか、今日のところは親鸞聖人の結積、七祖を受けての結積を宗祖が書いたところを少し解説的にお話をしたまでです。一応これで終わっていいですか。もし質問があれば何でもいいですよ。

質疑応答

質問者1・・・光明名号顕因縁と言うのが「正信偈」にあるではないですか。今、話されたそこを親鸞聖人が語られているということですか。

先生・・・そうです。善導大師のところ、「善導独明仏正意・・・」と今、おっしゃったところ、「善導独り、仏の正意を明かせり。」207ページです（西206、島12-52）。「定散と逆悪とを矜哀して、光明名号、因縁を顕す」。ここまですとこれは『観経』の外縁になります。そして「本願の大智海に開入すれば、行者、正しく金剛心を受けしめ、慶喜の一念相応して後、韋提と等しく三忍を獲」。覚りを獲るということですが、覚りを獲る心を金剛心とか慶喜の一念と言うふうここで顕されている。これが『大経』の信心をあらわす言葉になります。光明名号だけですと外縁ですから、その後因が説かれていって、光明名号と、金剛心、慶喜の一念の因と因縁を表すと、こういうふうにならざるを得ないのだと思います。よろしいでしょうか、言っていること

はみなわかりますね。

質問者 2 ・ ・ 先生ありがとうございました。それで、今日のところの「おおよそ往相回向の行信について、行にすなわち一念あり、また信に一念あり。行の一念と言うは、いわく称名の遍数について、**選択易行の至極を顕開す**。」、この「いわく称名の遍数について」、このところはどのように解釈したらよろしいでしょうか。よくわからない。

先生 ・ ・ これはそもそも、まず名号を称えるというときに、一生念仏を称えていく、これがありますね。その次に十念念仏を称えていく、これもありますね。一番少ないの是一念の念仏です。そうですね。だから乃至一念と言うのは、究極的な一つの念仏です。一生称えてもいいのです。十生称えてもいいのです。法然のように日課八万遍称えてもいいのです。だけど究極的には「たった一回の念仏でも救われる」と言うのが『大経』だから、その時にたった一回の念仏ということを表すときに「乃至一念」という言葉で表すのですよと。

そのあとの方、191ページの後ろから5行目のところに、「**いま弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞等に及ぶまで**」とありますね、わかりますか。これ本当は「下至十声一声に及ぶまで」なのです、もともとの原文は。そうすると十声称えても、十称えても、一称えても救われるよと。その「一」と言うときに、「乃至一念」という言葉を使う。一生称えてもいいのですが、略して一回念仏を称えると言っても救われる。

だから乃至一念というの、「**行の一念と言うは、いわく称名の遍数について**」、つまり南無阿弥陀仏を称える回数について、「**選択易行の至極を顕開す**」。選択本願の究極的な意味を明らかにするために乃至一念と言っているのだと。こういう意味ですよ。言っていることわかりますか。念仏を称えるというときに、普通は一生念仏を称える、それと法座に来たときは十遍ほど称える、それから面倒くさいと思って一遍しか称えないときもある、何も称えないときもある、というふうに念仏には、そういう回数があるけれども、究極的な、選択本願、究極的な回数、それは「乃至一念」。本当は、「乃至」というのは「略して」という意味です。これは生涯念仏を称えてなくてはならないのですが、略して一遍念仏しても救われますよ。それが『大経』の本願の念仏だから、本願成就文には「**信心歓喜せんこと乃至一念せん**」と説かれているのだと。だから一念というの、これは念仏の数です。数です。一回という意味。

数と考えてもいいし、こういうことを全部まとめて「行の一念」と言っていると考えてもいい。親鸞が言うのは乃至一念というの、称名の遍数について、称名の回数について、法然のように日課八万遍称えるということもあるけども、本願成就文では乃至一念、たった一つと書いている。それは選択易行の至極、究極的な一回の念仏を明らかにするという意味ですよ。だから乃至一念については、これは称名の数ですよ。ここで、行の一念、信の一念というの、数と考えてもいいけど、これは前に言ったことがある。覚えていませんか。この『大経』の下巻に「乃至一念」という言葉が三回出てくる。一つはこの第十八願の「**信心歓喜せんこと乃至一念せん**」。そして弥勒付属の「**信心歓喜せんこと乃至一念せん**」。もう一つは三輩章、上品上生から下品下生まで、東聖典44ページ（西41、島1-39）を開いてごらん、三輩段といわれるところ、44ページの最初に第十一願の成就文、それから第十七願の成就文、第十八願の成就文が出る。その第十八願の成就文と背中合わせに三輩段・三輩章が説かれます。ここは『観経』で言え

ば上品上生から下品下生に当たるところです。だからここが『観経』になったと考えたらいい、さっき僕が言ったのは。この一番最後のところ、東聖典46ページ、「もし深法を聞いて歡喜信樂せん。疑惑を生ぜず。乃至一念、かの仏を念じて至誠心をもってその国に生まれんと願ぜん」。ここに乃至一念が出てくる。いいね、そうすると乃至一念という言葉は、しつこいようですが、第十八願の乃至一念、弥勒付属の乃至一念、三輩章の乃至一念、ここに全部乃至一念という言葉が『大経』の下巻に三回出てくる。これはいいですね。法然は、この三回出てくる乃至一念を全部「称名念仏」と読みました。本願が成就したのだから、信心が成就しようが、行が成就しようが、とにかく念仏一つでいいのだと、これが法然のお立場ですから、この乃至一念を全部称名念仏で読んだの。

それに明恵が、皆さんよく知っているように、『摧邪輪』（ざいじゃりん）でかみついた。馬鹿なことを言うなど。これ全部称名念仏と言うけど、よくそこを読んでごらんと、「信心歡喜せんこと乃至一念せん」と説かれていると。だから乃至一念が百歩譲って、たとえ称名念仏であったとしても信心歡喜がなかったら空念仏になるのではないかと。だから称名念仏を説いているのは『観経』だと。それなのに『大経』を称名念仏と読むのはおかしいと言って批判したのが明恵です。明恵が正しいのです。

そうですね、「信心歡喜せんこと乃至一念せん」、ここもそう、ここもそう、ここもそう、全部「信心歡喜せん」と言うことがついていると。だから、もしこれが称名念仏であったとしても信心がなかったら空念仏やろうと。だから『大経』は、実は信心を説いている經典なのであって、お前が言うように称名念仏と全部読むことはおかしいと非難したのが明恵です。ですから親鸞はそのことをよく知っていますから、明恵が言う通り、その通りよと。しかし弥勒付属というのは、これは、わかるようにお釈迦様が弥勒に「南無阿弥陀仏を与えるから、うちに広めなさい」と。与えるときには南無阿弥陀仏しか与えられないね。信心を与えられるのなら、お父さんが偉かったら子供も偉くなるよ。信心は与えられませんね。もし与えられるとしても、念仏を称えなさいとしか言いようがない。だからこの弥勒付属のこの乃至一念は行の一念である。十八願は信の一念である。三輩章は自力の一念である。と分けて、十八願は信の巻、弥勒の部分は行の巻、三輩の段は化身土の巻に配当して明恵の批判に答えているのが親鸞の『教行信証』です。

その時に、行の一念と言う言葉は、実は、こういう議論の中で乃至一念、これを信の一念と呼び、信の一念と呼ぶ、これが『摧邪輪』の中に出てくるのです。その時の言葉をこういうふうにして入れているから、これが一遍の念仏かと言うとそうではないという議論の中で、行の一念と言って議論になっている。それから信の一念として『摧邪輪』の中で議論になっている。その言葉をそのまま借りて、弥勒の部分は行の一念ですよ、第十八願は信の一念ですよ、そして明恵が言っている三輩章の菩提心はこれは自力なのですよと、これは化身土の巻に回している。こういうふうにして親鸞は明恵の批判にちゃんと答えているのです。その時にこの言葉を表す言葉がないから、前に議論になった時にそういう言葉が使われているから、行の一念を表すと、こういう言葉ですよと、言っているということは、実は、この時の議論が背景にあるということ。ですから、たった一遍の念仏というふうを考えるよりも、こういう議論の時に、行の一念、信の一念と議論になったから、それを使っている言葉だと理解してください。いいですかね。

質問者3・折角一念のところをお話しいただいたのに、もう少し先生いいですか。今、ひと声

とか十声とか言ったけれども、声が出ない、憶念弥陀仏本願、憶念の念仏というのはどういうふうに。

先生 ・ ・ 声が出ないと言うのは。

質問者 3 ・ ・ それは声に出さなくてもいいのだと言うことですね。

先生 ・ ・ いいのです。しょうがないやろ、声が出ない人は。けど南無阿弥陀仏と言う気持ちがあれば救われる。親鸞はそう言っています。だからこの乃至一念というのは、たまたまここでは声に出る、最終的、究極的に一念ですよと言っているけど、もうちょっとそれをつづめると、声に出なくても一遍の念仏でいいのですと言ってもいいと思います。

質問者 3 ・ ・ ありがとうございます。

先生 ・ ・ 出来たら出した方がいいのよ。

質問者 4 ・ ・ たまたま聞きにくい質問なのですが、そもそも、乃至一念というのはどういう意味なのでしょう。

先生 ・ ・ だからさっきから言ってるでしょう、究極的な一念と。何を聞いているのですか。念仏を称えるというときに、生涯称える念仏もある。法然のように八万遍称える念仏もある。百遍称える念仏もある、十遍称える念仏もあるけど、乃至一念と言う場合には、究極的な最後の一念という意味で、ここでは「遍数」(へんじゅ)と書いてあるから、一遍念仏するということです。

質問者 4 ・ ・ 続いて本論の質問なのですが、先生はこの行の一念というところを行の締めくくりのところとして、重要なこととして問題にされているわけですね。

先生 ・ ・ 僕はしていないよ、親鸞がしているのです。

質問者 4 ・ ・ はい、それを引き継いで先生が問題にしているわけですね。言うたら、僕もここを質問しようと思ったら、垣本さんが質問されたのですが、称名の遍数、回数について、これはまさかその行の一念というのは、念仏は一回でいいのよということを行っているのではないのでしょうか。ここは。

先生 ・ ・ 違う、違う。

質問者 4 ・ ・ 先生がなんで大事かと言う意味がわからないのですが。

先生 ・ ・ 本願成就文に「乃至一念」ということが出てくるでしょう。だから、信心の本願成就文

にも乃至一念ということが出てくる。行の本願成就文にも乃至一念ということが出てくるから、親鸞はここで行の一念釈と言った場合には、行の一念そのことを問題にしてるのではなくて、本願の成就が、実は『大経』の内因を私たちに与えてくださるのですよという意味で、七祖の最後を本願の成就で締めくくった。その本願の成就文は、信の成就文も行の成就文も乃至一念ということがあるから、行の方では行の乃至一念を問題にしている。問題にしているけど、本当はこれは、本願成就文なのですよと言っているということ。君は本願成就文がわからないから、何のことかわからないのかもしれないが、そもそもこの乃至一念という言葉が独り歩きしているのではなくて、何度も言うように、第十八願の本願の成就文に乃至一念という言葉がある。第十八願の弥勒付属の本願成就文にも乃至一念という言葉がある。それから自力の方にも乃至一念という言葉がある。それを一緒くたにして称名念仏と法然が読んだのです。

これがまた法然が偉いのです。偉いんだけど、それが議論になったために、この本願成就文を、七祖の最後の締めくくりは、実は内因が大事だということをさっき言った。『観経』では外縁という。外縁だけでは救いにならないよと。『大経』の内因が大事ですよ。その『大経』の内因を明確に表すのは本願の成就文です。だからここに本願の成就文を持ってきている。だから七祖はずっと行の伝統を表してきたけども、南無阿弥陀仏の本願の成就文、そこに立っていたのですよということをおうとしている。

質問者 4・・・またまた逆らうようで恐縮なのですが、時間があるので。先生この十八願の成就文、44ページですよ、その乃至一念、それから46ページの三輩章の自力の一念の乃至一念、そして86ページの弥勒付属の行の一念の乃至一念、その乃至一念に先生がさっき言われた究極的な念仏という言葉も当てても、そのあたりがよく理解できないのですが、本当にその乃至一念がこの三つに共通…、だから質問したのは、その究極的な念仏という、一念という意味では、『大経』の三つのところに出てきているところが意味がよくわからない、乃至一念が繋がらないような気がして、僕がわかってないからですが、もうちょっと詳しく説明してください。

先生・・・「信心歓喜せんこと乃至一念せん」、信心が起こって南無阿弥陀仏と一声称えて頭が下がった。その頭が下がった人の信心は、「至心に回向したまえり」と。如来の本願の回向の信心にそこから生きていくことになる。だから、「信心歓喜せんこと乃至一念せん」、信心を起こして念仏を称えて頭が下がった。一生の念仏というよりも、たった一遍の念仏。そこに頭が下がった。その下がった時に起こってくる信心は「至心に回向したまえり」と。如来の方から回向して下さった信心が起こったのだと言うことを説いているのが本願の成就文です。それは信心のところでは、今詳しくそういうふうに説いているけれども、行のところでは「信心歓喜せんこと乃至一念せん」と。信心を起こして、そして南無阿弥陀仏と一声称えたのですというふうに説かれているけれども、信も行も不離だから、一緒だから、第十八願の信心の成就文と全く一緒のことをここは説いているのよと。そういう意味で、乃至一念という言葉がどちらも説かれているから、この乃至一念ということを持ってきて、行の一念、信の一念というふうに、本願の成就文で着地しているのですよと。こういう意味です。

質問者 4・・・『摧邪輪』の明恵さんに、ここは乃至一念を三か所持ってきたと言うのは、さっき言

われた全部称名念仏で読んでいると言って明恵さんが批判したことに対して、一つひとつ、このこれはこうよと、称名念仏じゃないよと、ここはこうよと三つに分けて親鸞聖人が『教行信証』で反論しているということですか。

先生・・・そうです。明恵の場合は、『大経』は称名念仏でなくて乃至一念とあるように、信心が大事なのだとすることを明恵は主張します。その通りです。『大経』は信心を説いている經典だから、一応その通りなのです。ところが彼が言っている信心は自力の信心を言っているから、お前が言っている信心は、実は三輩章のところの信心を言っているのだから、これは自力なのです。これでは救われませんよと言って化身土の巻に回す。

そして法然が言っている乃至一念、法然の信心は、これは本願力回向の他力の信心なのですよという意味で、信の巻と行の巻に回す。そういう形で自力の信心とは決定的に違うのだとすることを明恵にわからせるために、こういうふういきちっと分けて説きました。

ですから、信の巻に「**至心信楽の願**」というのは、ここでは皆さんそこまで詳しく知らなくてもいいけど、至心信楽の願というのは親鸞が付けた願名であると、これまでみんなそう思ってきた。しかし『摧邪輪』を見ると明恵が先に至心信楽の願だと言っているのです。第十八願を。「これは至心信楽の願ですよ」と明恵が先に言っているから、だから信の巻の標挙の至心信楽の願を挙げるのは、これは実は、明恵の言う自力の信心なのか、法然が言う他力の信心なのか、それを明らかにするのが信の巻の課題だったと言ってもいい。だからこれから皆さんと読んでいきますけども、全部本願力回向の他力の信心を表すのが信の巻です。そうすると明恵が表す信心とは違うことを、明恵の言った願名を挙げてわざわざ証明をしているのです。そのへんに親鸞の偉さがあります。まあ勉強すればするほど感動しますよ。夜寝られないようになります。偉いでしょう親鸞は。すごいじゃないですか。すごいよ。天才よ。まあ今までね、明恵の『摧邪輪』を読んだ人がいないのよ、あんまり。読んでごらん面白いから。

質問者 5・・・すみません。先生は、『大経』の正定聚とおっしゃったのですが、『観経』は死んでからとおっしゃったのですが、それでは、二種深信は信心の内に入らないのですか。二種深信は自力の信心ということですか。

先生・・・二種深信を親鸞の信心だ親鸞の信心だというふうに、ほとんどの人が言うのです。それは『大経』に立った親鸞からすると二種深信は十九願から十八願へという信心だと考えてください。自力から他力へという信心だと考えてください。

質問者 5・・・悪いけど、本物ではないということですか。

先生・・・本物でないわけではないけれども、そこはものすごくややこしいの。本物でないわけではないのです。その時に本当に自力から他力に転回をしたという感動を得て、仏様の覚りに目を開くわけです。ところが後で段々段々煩惱の方がまた出てくるから、あの時に自力から他力に展開して悟ったというか、覚りの中に生まれたという感動を持ったのに、後から後からまた煩惱が出てくるから、あれは何だったんだということになるわけよ。その時に本物でないわけではない

のですが、その時には本当にわかっているのです。二種深信の場合には、十九願と二十願とをちゃんと包んで善導大師は言ってくださっている、と思います。だけど二十願の煩惱が後から後から出てくるから、だから、そうなってくるとあの時の翻りは十九願の翻りやったんだと、こういうふうに『大経』の方は考えてもいいと思います。

『大経』の特徴は煩惱を二つに分けること。煩惱が二つに分かれるんだ。三毒五悪段を読むとわかるけどね。貪欲と瞋恚、これは十九願の煩惱。愚痴、これは二十願の煩惱。というふうに煩惱を二つに分けるの。そして貪欲と瞋恚というのはわかるね。腹を立てる、それから欲深く、何か欲しいとか、あれが欲しいとか言う。これは時々反省ができる。時々するでしょう。「しまった、あんな欲せなよかった」とか。

ところがこの二十願の煩惱は、反省しても自力だから、だからなんぼ反省しても反省しても、人間が反省できない煩惱がある。これの方が深い。だから十九願の煩惱よりも二十願の煩惱が深いというふうに、二十願と十八願が重なって説くのが『大経』の特徴。

質問者 ・・・重なってと言うところですね。二十願と十八願が重なってというところ、『観経』の中でみたときに、華座観と下品下生の中に入って、二つの中に重なって、

先生 ・・・言っていることがよくわからない。下品下生と何が重なっているって。

質問者 ・・・下品下生のところと、華座観のところ『大経』と『観経』が重なっているのかなと思ったのですけど。

先生 ・・・つまり、『観経』で言う悪人、極重の悪人というものと、『大経』の本願ということが重なっていると言うのですね。そう言えば、それはそうです。ただ華座観と下品下生が重なっていると言うから訳がわからんことになる。そうではなくて悪人というものと本願というものが重なっているということやね。それはその通り。悪人を救うのだから、重なっていないと救いようがないから、重なってます。そうです。ところがこの悪人も、「悪人だ」と思う。「あそうだ、自力を捨てた」と、「他力に帰した」と思うことが最初の回心です。ところが後から後からまた煩惱が出てくるからね、「これ、どないしよう」と言うのが二十願の煩惱のこと。他力他力と言っている根性が自力と言うのと一緒。これはいつまでたっても消えない。それをどうするかと言うのが『大経』の問題。これは仏さんの問題やけど。

だから二種深信を今言ったように煩惱と重なっているから、二種深信を親鸞の信心だと言っても間違いではないのです。間違いではないのだけでも、『大経』のような眼に立って、煩惱を二つに分けるのですというふうな眼に立った時には、これはやっぱり『観経』の方は十九願の自力だと、こういうふうに理解をするべきだと思います。なぜなら『観経』は方便です。『観経』は十九願です。だから『大経』、『観経』、『阿弥陀経』とあって、『大経』十八願、『観経』十九願、『阿弥陀経』二十願と当てるでしょう。「三三の法門」と言うのだけど、そんなふうに、十九願の信心を表すというふうに見た方が親鸞の眼に近い。『教行信証』はそうになっているから、『大経』はそうになっているから、一応そんなふうに理解してみてください。今、言ったこと大事なのです。

『大経』は自力の煩惱を二つに分けると知っておいてください。だから化身土の巻は十九願の

煩惱と二十願の煩惱を親鸞は分けている。化身土の巻の十九願の方は要門と言う。二十願の方は真門と言う。『大経』がよくわからないと、それを何で分けているのか意味がわからない。ところが、『大経』がちゃんと貪・瞋の煩惱は十九願。時々反省ができる。ところが反省している根性が自力だから、これ（愚痴）が反省ができない。これが深い。だから仏様は、これ（愚痴）をどう救うかということが『大経』の最終的な課題になっていく。だから『阿弥陀経』の「果遂の誓い（第二十願）、良（まこと）に由（ゆえ）あるかな」（「化身土の巻」：東聖典356頁、西413、島12-187）と言うのはそういう意味です。まあ難しいかね。

質問者6・・・今日はありがとうございました。途中で青木先生とのお話が出ましたが、今もずっとこの三部経の、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』と言われていて、『大経』から『観経』ができた。『大経』から『阿弥陀経』ができてきたというお話があったと思うのですが、三願転入ですとか、十九願から十八願、二十願から十八願と、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』、それぞれできた順番は、『大経』ができて、『観経』じゃなくて『阿弥陀経』が出来て、そして『観経』ができてるとのことだと思うのですが、だから何というか、普段こちらで勉強する時は、十九から十八、二十から十八という言い方をするので、だからそういう意味で言うと、先生が言われた『大経』から『阿弥陀経』ができた、『観経』ができたという、そういう順番が、だから何というか、ちょっと説明が難しいのですが、そういう順番から言うと、普段当たり前のように『大経』・『観経』・『阿弥陀経』と言うじゃないですか。何で『大経』・『阿弥陀経』・『観経』というふうに言わないのかなあと。そんなこともちょっと疑問に思ったのですが。

先生・・・それは、『大経』の下巻に『観経』が先に説かれている。「一心帰命」と言うことがないと仏教の始まり様がない。なぜ『大経』・『阿弥陀経』なんや。何で願生から始まるの、仏教が。そんな馬鹿なことあるか。法然と出遇って仏教が初めて親鸞のものになっていくやろう。その出遇いを表すのは『観経』なのだから。『観経』、そして今おっしゃってくださったように『観経』の回心があったとしても、煩惱が後から後から出てくる。それをどうするかと言うのが『阿弥陀経』なのだから、だから『観経』・『阿弥陀経』と言う順番で『大経』の下巻がそういうふうになっているわけです。だから、『大経』・『観経』・『阿弥陀経』と言うわけで、別に、『大経』・『阿弥陀経』・『観経』と言ってもおかしくないかもしれないが、それはやっぱりおかしいわ。仏道の順番としては。そういう質問が出るということがまずわからない。私には。

だって、仏教というのは師との出遇いから、阿難と釈尊が出遇ってから仏教が始まるでしょう。そこに『観経』の大事な問題がある。自力から他力へと言う問題が。

質問者6・・・こっちから見たら、だからそういう順番で、それはわかります。

先生・・・そうや。そして『阿弥陀経』の願生ということが改めて問題になってくる。だから『観経』・『阿弥陀経』の順番で『大経』の下巻は説かれているから、『大経』と『観経』と『阿弥陀経』と。こういうことやな。

ああそうか、君が言っているのは成立年代のことを言ってるのか。ああそれはわからないな。成立年代のことについては。確かに『観経』が一番遅いかもしれないけど、それはそうかもしれ

ない。だからその辺のことがあるから、僕はそういうふうに言わんのだ。そのうち何か出てくるよ、資料として。ああそうか、すまんすまん。成立年代が『阿弥陀経』の方が早いからと言いたいのかな。ああそういうことか、そうかも知らんけど、仏道はちょっと違うよ。やっぱり。

質問者 6・・・でもある意味、すごく納得はできました。こちらから仏道としての順番はそうなんですけど。

先生・・・三願転入でも十九、二十、十八になっているでしょう。十九『観経』、二十『阿弥陀経』、十八『大経』。『観経』・『阿弥陀経』・『大経』になっているでしょう。自力から他力へ、十九願から二十願の回入と言うのが回心と書いてある、親鸞は。だから回心と言うのは、十九願の自力から十八願に転入すること、これが回心です。ところが回心があった後に問題になってくるのが二十願の問題だから、二十願の問題がまたあとに問題になってくる。三願転入もそうになっている。順番に。そういう意味でさっき十九願から十八願はと言うのは、親鸞の場合にはやはり十九願の自力から十八願の他力に、それが回心と言うことですよと、ちゃんと書いてるからね。書いた通り僕は言ってるのよ。そうになっているのです。そして、そのあとに問題になるのは二十願だということになっていますから。いいですか。

田畑先生・・・ありがとうございました。ちょっと時間が過ぎましたが、今回はこれで終わらせていただきます。12月をご案内の中にあると思います。先生の体調が悪くない限りは予定通り実施します。

先生・・・私は、どんなに悪くても来ます。

(恩徳讃、終了)